飯山市埋蔵文化財調査報告　第54集

上野遺跡Ⅸ

―丘陵南端　個人住宅兼店舗・車庫建築に伴う調査―

1997. 3

長野県飯山市教育委員会

飯山市埋蔵文化財調査報告　第54集

上野遺跡Ⅸ

UE NO

―丘陵南端　個人住宅兼店舗・車庫建築に伴う調査―

1997. 3

長野県飯山市教育委員会

例　言

1　本書は、長野県飯山市大字常盤字外和樗3921－56・57番地に所在する、上野遺跡の緊急発掘調査報告書である。

2　今回検出された遺跡は、旧石器時代の石器群、縄文時代の落し穴、平安時代の竪穴住居址・掘立柱建物址・集石土坑である。

3　調査は個人による住宅兼店舗および車庫の建築工事に伴うもので、飯山市教育委員会が平成８（1996年）年４月18日から５月31日まで実施した。

4　上野遺跡は過去に８回の調査報告がなされているので、本報告は上野遺跡Ⅸとして報告する。

5　発掘調査は国庫補助事業を受けて実施した。

6　発掘調査は以下に掲げる組織で実施した。

飯山市遺跡調査会（平成８年度）

顧　　問	小山邦武	市長
会　　長	滝沢藤三郎	市教育委員会委員長
	丸山　登	市教育委員会委員長（平成８年10月10日より）
副会長	水野光雄	市社会教育委員会長
委　　員	高橋　桂	市文化財保護審議会会長
	藤巻泰雄	市議会総務文教委員長
	田中精司	市議会総務文教委員長（平成８年12月12日より）
	高橋英吉	市公民館長
	小川幹夫	市教育委員会委員長職務代理
	藤巻富二美	市教育委員会委員長職務代理（平成８年12月24日より）
	岩崎　彌	市教育委員会教育長
	月岡保男	市教育委員会教育次長
事務局長	山崎賢太郎	市教育委員会生涯学習課長
事務局次長	町井和夫	市教育委員会生涯学習課社会教育係長
事務局員	望月静雄	市教育委員会生涯学習課社会教育係

地元関係者

常盤公民館長	中澤千尋
上野区長	小出　治
同副区長	小林喜久雄
道路委員長	小出一男
上野の森の会	中原　信
隣接地権者	小林佑幸

調査団

団　　長	高橋　桂
調査担当	望月静雄
調査員	常盤井智行　田村泉城　小林新治

作業参加者（順不同）

小出まさ子・万場義秋・小出えい（上野）　鈴木ため・鈴木　操（大倉崎）　竹内大五郎・樋山　巌・石沢悦次・藤沢和枝（戸狩）　滝沢きよえ・清水隼人（柳新田）　高橋喜久治（下水沢）　樋口　栄（温井）　大熊直三（小沼）　土屋久栄（伍位野）　宮沢　豊（飯山）

整理参加者（順不同）

小林裕子（戸狩）　栗岩容子（瀬戸）　藤沢和枝（戸狩）

7　本書で使用する方位は真北であり、地区割りは国土座標第８条に準じている。

8　本書に掲載した土器・陶器の断面白ヌキは土器を、断面黒塗りは須恵器を、断面アミ目は灰釉陶器を示す。また表面のアミ目は黒色処理および施釉部分を表わす。

9　文責は目次に記した。遺構図面整理・遺物実測・トレースは藤沢和枝が主体となって行なった。遺物復元・写真撮影は田村が担当し、遺構写真は常盤井、小林新治が撮影した。

10　発掘調査の図面・出土品は、市内大深の市埋蔵文化財センター（旧三中寄宿舎）で保管している。

目　次

第1章　調査経過 …… 1

1　調査に至る経過 …… (望月静雄) …… 1

2　調査経過 …… (常盤井智行) …… 1

A　発掘調査 …… 1

B　層序 …… 2

C　調査日誌抄 …… 2

第2章　遺跡の概要 …… 4

1　遺跡の位置と環境 …… 4

2　上野遺跡の過去の調査 …… 4

第3章　遺構 …… 9

1　旧石器時代 …… (望月静雄) …… 9

2　縄文時代・弥生時代 …… (常盤井智行) …… 17

3　平安時代 …… 17

第4章　遺物 …… 22

1　旧石器時代 …… (望月静雄) …… 22

2　縄文・弥生・平安時代 …… (常盤井智行) …… 29

第1章　経　　過

1　調査に至る経過

飯山市は、埋蔵文化財保護については公共機関による土木工事をはじめ、個人住宅や店舗等についても出来る限りの把握に努めており、広報等でも保護について啓発活動を行っている。また、農業委員会からの農地転用申請などの回覧により、小面積でも対応しようとしている。しかし、平成8年度における国庫補助額は計画書の半分であって、もはやこうした対応ができない状況となっている。

平成7年8月、常盤地区上野区の小出大暎氏ならびに小出一男氏より、上野遺跡内における土木工事について照会があった。

小出大暎氏は、開通したバイパス沿いの自分の土地に住宅兼店舗を建設したいというものであった。建物部分は丘陵の端部、河川敷に至る崖の部分を盛土して建設するというもので、遺跡についてもかつての所見から調査の必要はないだろうという判断となった。ただし、道路沿いに設置される駐車場部分については、遺跡の端部であるが遺構が検出される可能性が高いため、最低確認調査の必要性があることを伝えるとともに協力を依頼した。

小出一男氏は、やはり開通したバイパス沿いの自分の土地に農機具格納庫を建てたいというものであった。建設位置はバイパスに接しており、平成元年度に行なった発掘調査でも旧石器石器群や弥生時代～平安時代住居跡等が検出された地点に接していた。そのため、工事着手前に発掘調査を実施して、記録保存を行ないたい旨の依頼を行なった。

両氏とも埋蔵文化財保護について深い御理解をいただき、工事着手を延期していただくことで調査期間を設けることができた。

なお、これに伴う予算については、工事の性格上原因者に負担を求めることができないので、このほかに予定されている市内遺跡発掘調査と合わせ国庫補助事業として平成8年度に実施すべく事務手続きを行なった。

補助金関係

平成8年5月29日　平成8年度国庫補助事業について（提出）

8月9日　平成8年度文化財保護事業補助金の交付決定について（通知）

2　調査経過

A　発掘調査

今回の発掘対象地は、個人の住宅兼店舗および車車建設予定地で、上野丘陵南端部にあたる。眼前に千曲川が流れ、初春には冠雪した東山連山を望み、木々の新緑が美しい。

調査前の地目は、国道117号バイパスに東接する畑で、作業員の交通安全確保に注意を要した。バイパス部分は既に発掘が行われている。今回対象地は土地利用のための盛土がなされており、表土除去時の排土量が多くその処置に苦労した。

発掘面積は約470㎡。平成8（1996）年、雪融けを待って4月24日から5月30日まで調査を行った。

調査対象地は千曲川に向かって東に傾斜する斜面で、調査は斜面上位の緩斜面部分を行った。ただし、

本来ならば急斜面部分まで調査し、遺構の分布限界を確かめるべきであるが、前述のとおり排土が多く、調査範囲を限定せざるを得なかった。

大地区割りは平成４（1992）年に国土座標第８条に基づいて設定した100ｍ方眼50区画を踏襲。今回は39・44区である。大地区内は５ｍ方眼とし南から北へ１～20、西から東へＡ～Ｔの付番をしてグリット表示とした。

遺構番号は前回までの付番の次の番号からの通番とした。ピットは建物としてまとまるものは建物内で通番とし、他はグリット各に通番とした。今回付番したピット以外の遺構番号は次のとおりである。

ＳＫ164～173　ＳＢ29・30　Ｈ35号住居址
石器群第14～16地点

遺物の取り上げは、遺構出土のものは遺構毎に、遺構外のものはグリット毎に一括して取り上げたが、旧石器については微細図を作成しグリット毎に通番して取り上げた。今回の略号は96ＵＮ39および44。

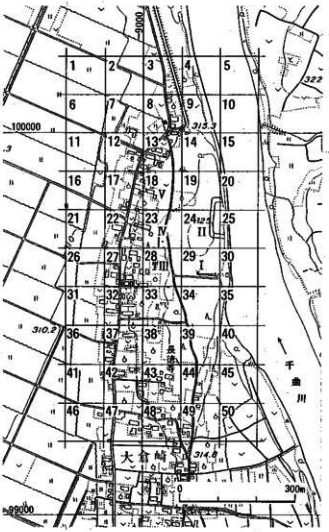


図１　上野遺跡大地区割　１：10,000

Ｂ　層序

上野遺跡の基本的な層序は上位からⅠ茶灰色土（表土・盛土）、Ⅱ黒色土、Ⅲ茶褐色土（漸移層）、Ⅳ黄色粘質土（地山）である（図５参照）。

今回調査地は、丘頂に近い西部では表土直下がⅣ層の地山であり削平が著しいし、一部クラックの割れ目が顕著な褐色粘質土層が認められた。斜面下位へ向かうほど盛土層が厚く、地表から遺構検出面までの深さが１ｍを越えている。

黒色土内からの遺物の出土は上野遺跡の他の調査地に比べ少ない。

Ｃ　調査日誌抄

４月９日　発掘調査日程の打合せを行い、地権者に表土除去日と発掘開始日を伝え、現地確認を行う。

４月18日　重機による表土除去開始。北側の小出一男氏所有地から始める。上野公民館にて地元との発掘打合せ会を行う。

４月23日　発掘器材の搬入、テント設置

４月24日　発掘開始式ののち、北側からジョレンがけ精査開始。昨年設置した国土座標杭を基準に地区割り杭を設置。

４月25・26日　ジョレンがけ続行。土がかたく難渋。弥生時代・平安時代の遺物出土し始める。

４月30日　Ｋ～Ｍ・９・10区で、縄文時代の落し穴らしき遺構と、竪穴住居址らしき遺構の輪郭を検出。

５月１日　Ｋ～Ｍ・９・10区遺構確認状態写真撮影。午前10時半から雨のため作業中止。

5月2日　北から遺構掘り下げ開始。落し穴半割。土層写真撮影、実測。

5月7日　遺構命名。落し穴はＳＫ164～166、竪穴住居址はＨ35号住居址。Ｈ35号住居址の西の小ピットから黒色土器坏完形で出土。写真撮影。Ｈ35号住居址土層観察用オビを残し完掘。写真撮影。

5月8日　Ｌ・Ｍ－６～８区掘り下げ。遺構はなく、攪乱が多い。

5月9日　雨のため現場作業中止。埋文センターにて「かわら版上野」作成。

5月10日　Ｌ・Ｍ－６・７区精査。遺構掘り下げ。Ｋ～Ｌ－８～10区平板測量。

5月13日　雨のため現場作業中止。埋文センターにて見学会資料作成

5月14日　Ｋ～Ｌ－９・10区旧石器調査。黄色粘質土掘り下げ。クラックの割れ目があるかたい層の上で礫群検出。Ｌ～Ｎ－５～７区平板測量。

5月15日　旧石器調査。遺構掘り下げ。Ｈ35号住居址平板測量。午後３時から常盤公民館と共催の発掘現地見学会開催。約30名出席。

5月16日　旧石器調査。Ｈ35号住居址貼床断ち割り。遺構ほぼ完掘。

5月17日　旧石器出土状態写真撮影、分布図作成ののち遺物とり上げ。小出一男氏所有地分の調査を終了。

5月20日　作業員を休みとし、小出一男氏所有地分を重機により填圧しながら埋め戻し。小出昇氏所有地分表土除去。高橋団長、桐原健・関孝和・宮下健司諸氏視察。

5月21日　小出昇氏所有地分ジョレンがけ開始。地区割杭設置。調査地中央にゴミ穴と思われる大きな攪乱坑あり。吉原佳一氏来跡。

5月22日　雨のため現場作業中止。

5月23・24日　遺構上面検出状態写真撮影。攪乱坑内、遺構のない東南角を排土置き場とする。石の詰まった土坑ＳＫ172検出。44区人力による表土除去開始。

5月27日　遺構全景完掘写真撮影。集石土坑ＳＫ172掘り下げ。遺構全体平板測量。

5月28日　ＳＫ172微細図作成ののち半割。Ｍ－１・２区旧石器調査。44Ｍ－19・20区黒色土まで掘り下げる。

5月29日　ＳＫ172完掘、写真撮影、実測完了。Ｍ－１・２区旧石器群完掘。微細図作成ののちとり上げ。44Ｍ－19・20区完掘。写真撮影、測量ののち人力による埋め戻し。「かわら版上野」作成。

5月30日　発掘器材の撤収を行い、現場作業を終了。終了式を上野公民館で行う。

5月31日　重機による埋め戻し。

第2章　遺跡の概要

1　遺跡の位置と環境

上野遺跡の所在する飯山市は長野県の北端部に位置し、日本有数の多雪地帯である。市の中央を千曲川が流れ、肥沃な沖積地を形成し水田が広がる。しかし沖積地の本格的な開発は近世以降のことで、中世以前の遺跡は山麓や丘陵地帯に分布する。注目されるのは旧石器時代遺跡の多いことで、野尻湖周辺と並んで日本でも有数の旧石器遺跡密集地となっている。また弥生時代、平安時代の遺跡も多く、両時代が当地の開発の画期であったことを物語る。

上野遺跡は通称「上野の森」と呼ばれる低丘陵全体に広がる遺跡である。丘陵は千曲川に比高約20mの崖で東接し、西に常盤平と呼ばれる沖積地を望む。南北約1.5km、東西約500mの広さをもち、樹高約20mの広葉樹あるいは桧が林立し、森を形成している。縦貫する国道117号バイパスを始めとする開発の樹木伐採で往時のおもかげは失われたが、今も森の風情を残している。

古代の景観を想像すれば、豊かなる森の恵みと、千曲川の魚貝類。丘陵西端の湧水を利用した水田。竪穴住居から立ちのぼる調理の煙。そして時には千曲川と水運、対岸への渡し場としてのにぎわいもあったであろう。多雪地帯とはいえ、住環境はすぐれている。むしろ雪は障害でなく、恵みであったのかもしれない。

2　上野遺跡の過去の調査

上野丘陵は、古くから古墳、館跡、弥生時代中期の太形蛤刃石斧の出土地として知られている。そして飯山北高等学校地歴部による分布調査で、玉髄製の掻器数点を採集し、旧石器時代の遺跡であることも判明した。

発掘調査は、昭和63（1988）年の国道117号線バイパス常盤大橋橋台工事に伴う上野館跡（大倉崎館跡）の調査を端緒として、今回まで毎年のように9回の緊急発掘調査が行われている。

その結果、遺跡は現在の上野集落を含む丘陵全体に広がり、旧石器、縄文、弥生、古墳、平安、中世にわたる一大複合遺跡であることが判明している。発掘面積はのべ約14,000㎡となる。

上野遺跡の発掘調査一覧

1988（昭和63）年	9月28日～11月22日	上野館跡	1000㎡	『小沼湯滝バイパス関係遺跡発掘調査報告Ⅰ』1989
1989（平成元）年	6月13日～9月19日	117号バイパス	5000㎡	『同上Ⅱ』1990
1990（平成2）年	6月28日～7月11日	市道7－335号線	300㎡	『上野遺跡』1991
1992（平成4）年	6月11日～10月2日	工場団地取付道路	3700㎡	『上野遺跡Ⅳ』1994.2
1993（平成5）年	5月20日～7月30日	チェーン着脱場	1500㎡	『上野遺跡Ⅴ』1994.3
1994（平成6）年	5月11日～7月2日	揚水機場	1100㎡	『上野遺跡Ⅵ』1995.3
1994（平成6）年	9月19日～9月29日	レストラン「ミルテ」試掘	350㎡	『上野遺跡Ⅶ』1995.3
1995（平成7）年	4月20日～5月31日	レストラン「ミルテ」本調査	870㎡	『上野遺跡Ⅷ・柳町遺跡』1996.3
1996（平成8）年	4月24日～5月30日	個人住宅兼店舗・農機具格納庫	470㎡	『上野遺跡Ⅸ』

報告書はいずれも飯山市教育委員会発行

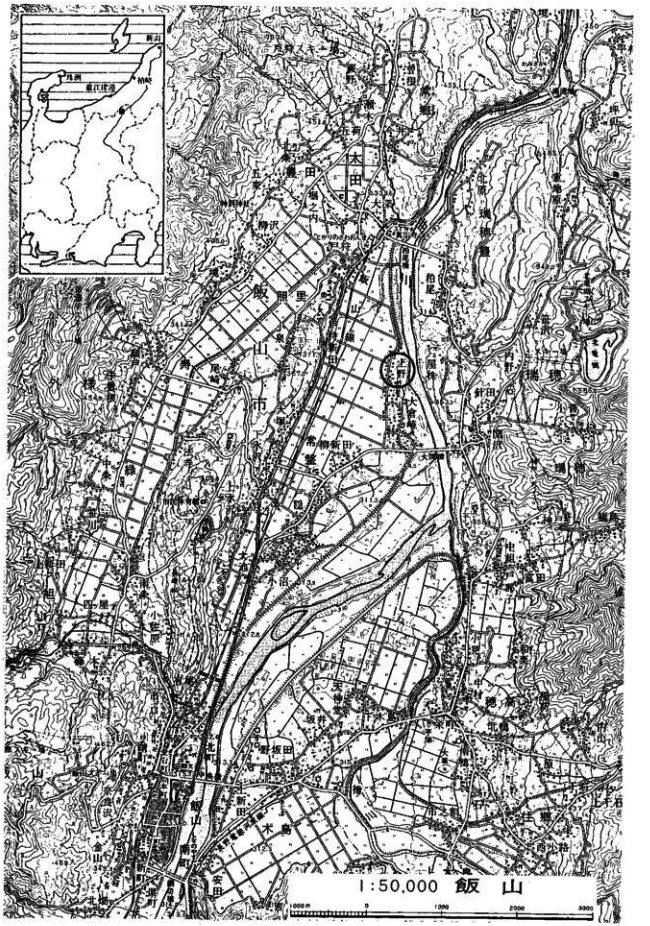


図2　上野遺跡の位置

これまでに検出された主な遺構・遺物（今回検出分を含む）

旧石器時代　石器群（礫群を含む）25地点　ナイフ形石器・掻器・尖頭器・他

縄文時代　落し穴52（溝状土坑49・長方形土坑３）　早・前・中・後・晩期土器　石器

弥生時代　中期竪穴住居址10　後期竪穴住居址３　掘立柱建物址19　木棺墓72（うち礫床木棺墓２）土坑墓10　中期・後期土器　石器　勾玉　管玉　紡錘車　他

古墳時代　初頭北陸系竪穴住居址１　掘立柱建物址１　初頭方形周溝墓９　初頭北陸系土器

平安時代　竪穴住居址35　掘立柱建物址10　土坑墓５　木棺墓２　集石土坑１　溝１　土器　陶器　鉄製品　ふいご羽口　鉄滓　石製丸鞘　砥石　軽石　土錘　他

中世　館跡１　輸入磁器　国産陶器　瓦質風炉　石臼　鉄製品　銭貨　他

今年度調査地の西隣国道117号線バイパスの調査　1989年

現在はバイパスが通り左右にレストラン・食堂が建っている。今年度調査地は右手の土山の下

上野館跡（大倉崎館跡）出土品

左は瓦質火炉（茶道具の風炉）右は輸入磁器と国産陶器

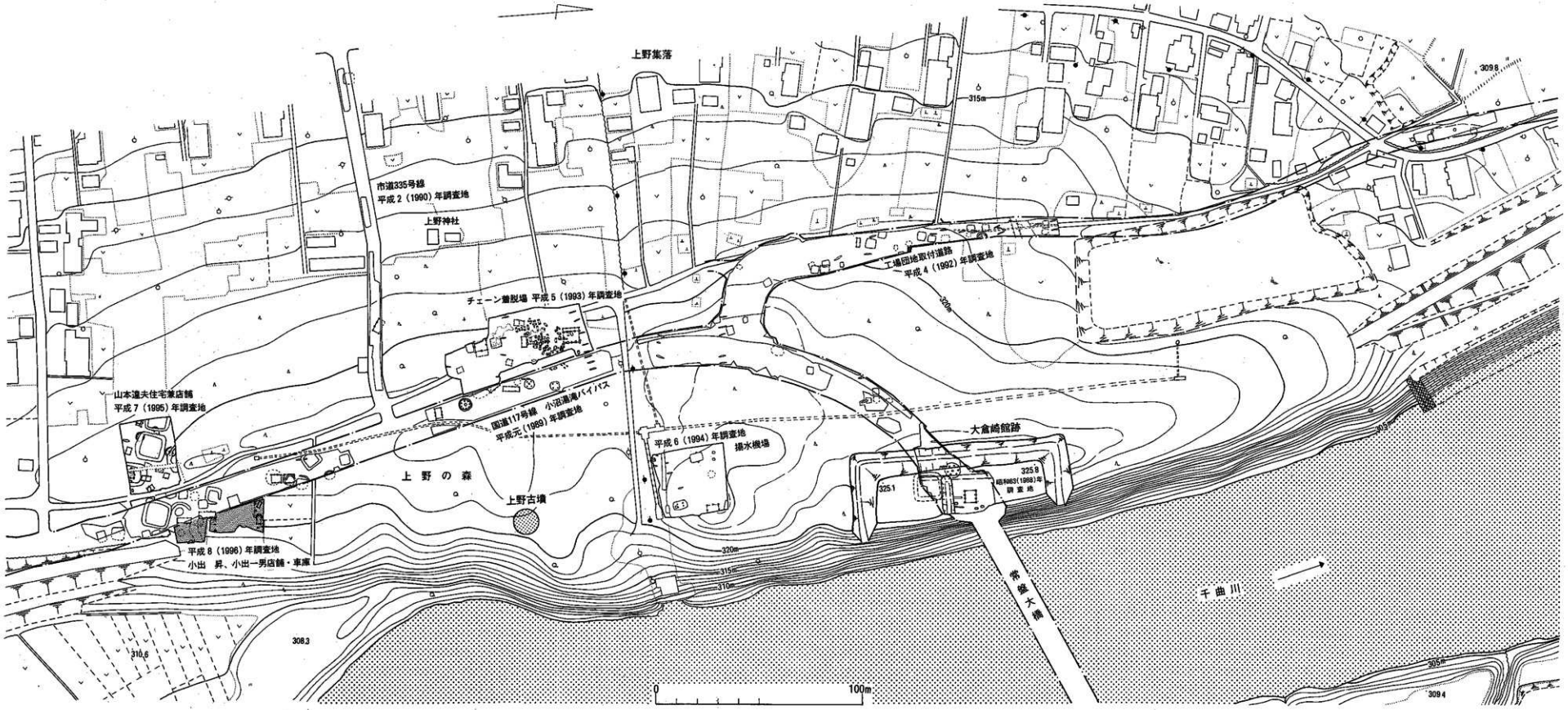


図3 調査地周辺の地形 1：1,500

第3章　遺　　構

1　旧石器時代

今回の調査によって検出された当該期の遺構は、石器群集中箇所3である。本遺跡の過去の調査によって検出されている石器群集中箇所は13であり、今回検出された遺構を第14～16（石器群出土）地点と呼称することとした（図6）。

石器群はいずれも第3層とした漸移層から第4層の褐色風化テフラ層の上部にかけて出土している。姶良Tn火山灰（ＡＴ）は、この褐色風化テフラ層の下限に降下があったと推定されており、石器群はこれよりかなり上位の褐色風化テフラ層～第3層漸移層が文化層と想定される。

石器群の出土状態は、縄文時代以降の遺構が構築されている関係で破壊を受けている。そのため、石器群のセット関係や遺構の状況についてはかなり変形していると考えられる。

(1)　第14石器群（図7）

調査区の北端、Ｋ・Ｌ－９・10区位置する。北に延びると推定されるため、現況は８×４ｍであるが直径約８ｍと規模を持つと推定される。東・南側は平安時代竪穴住居等があって不明であるが、石器群の分布密度からすればほぼ限界であろう。

出土遺物は掻器を主体とした石器群約30点のほか、幼児頭大から拳大の礫約30点も出土している。そのうちの約半数は１×２ｍの範囲に多少まとまっている。明確に赤化している礫も数点ある。

(2)　第15地点（図８）

調査区の北東隅、Ｍ・Ｎ－９・10区に位置する。直径５ｍの範囲を有するが、平安時代竪穴住居および柱穴によって全体的に破壊を受けている。出土状態もまばらな出土であり、第14地点の石器が竪穴住居構築にともない移動した結果とも受け取れる。

遺物は、玉髄・黒曜石の掻器・削器など製品が多い。幼児拳大の礫も数点出土しているが、赤化しているものは認められない。

(3)　第16地点（図９）

調査区の南側、Ｍ－１・２区を中心として出土した。２×１ｍの小規模な石器群で拳大の礫・石器ともに約10点で構成される。東側にはローム マウンドがある。出土層位は褐色風化テフラ層の上部で、比較的攪乱は少ない。

石器は、掻器・削器などのほか剥片もある。

なお、このほかにも断片的に旧石器が出土しているが、後世の遺構内よりの出土である。

以上の各地点出土石器群は、従来より出土している上野遺跡の石器群と層位的にも石器群の組成等においても相違していない。編年には難しいところもあるが、今までの検討から尖頭器を伴う時期で、玉髄製掻器に代表される石器群であると位置付けられる。

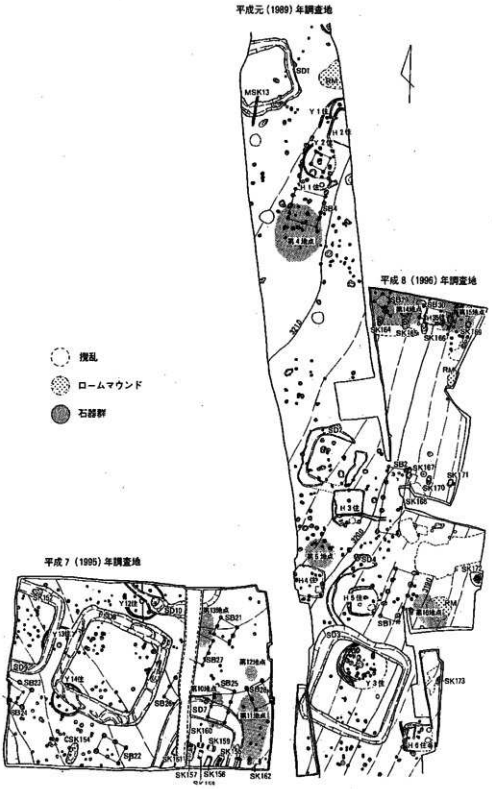


図4　調査地周辺の遺構　1：500

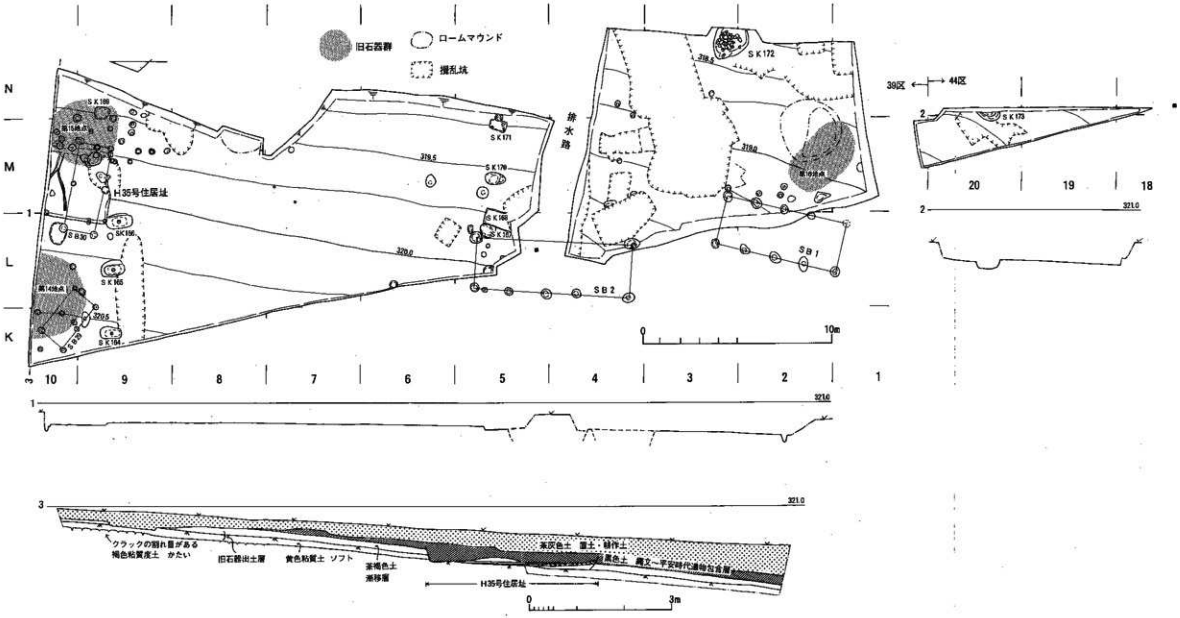


図5 調査地全体図・土層図 1：200 1：80

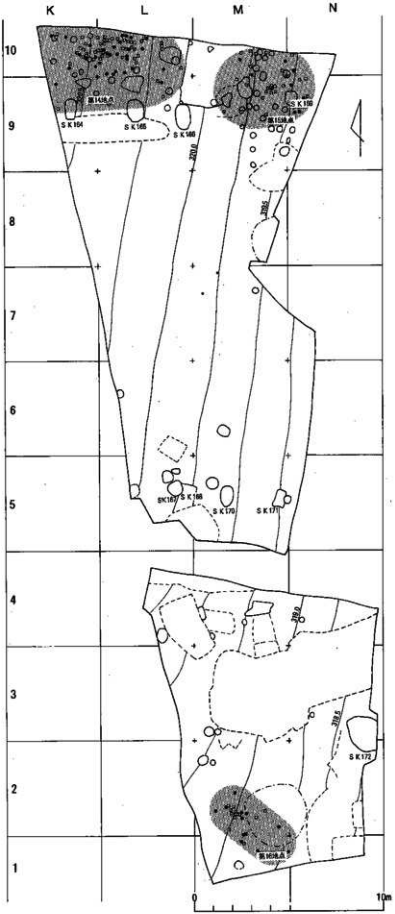


図6　石器群分布図　1：200

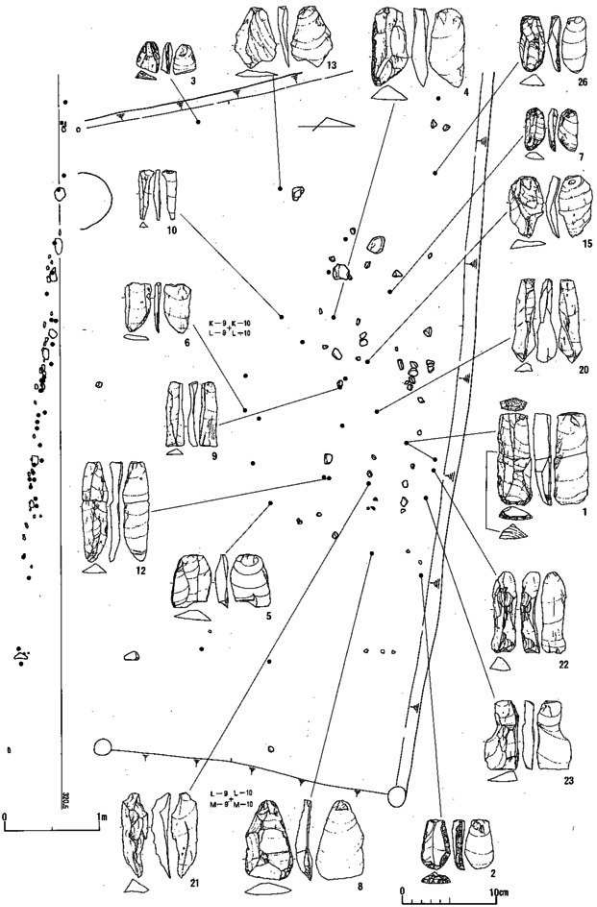


図7　第14地点遺物分布図　1：40

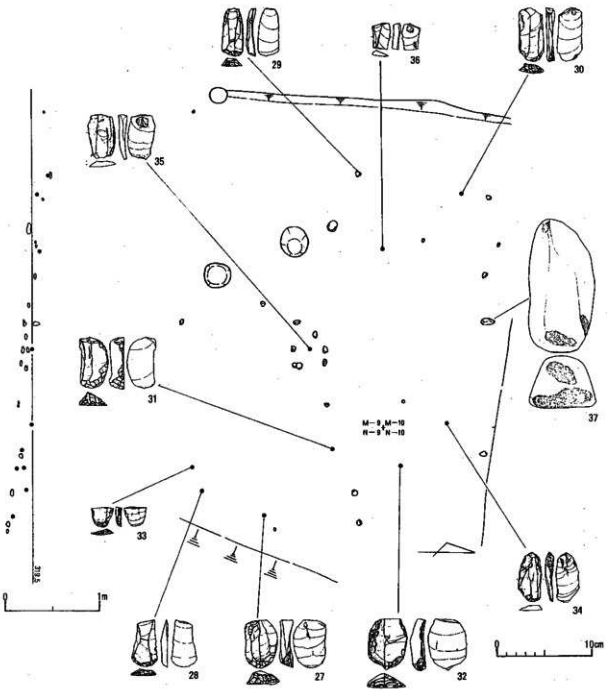


図8　第15地点遺物分布図　1：40

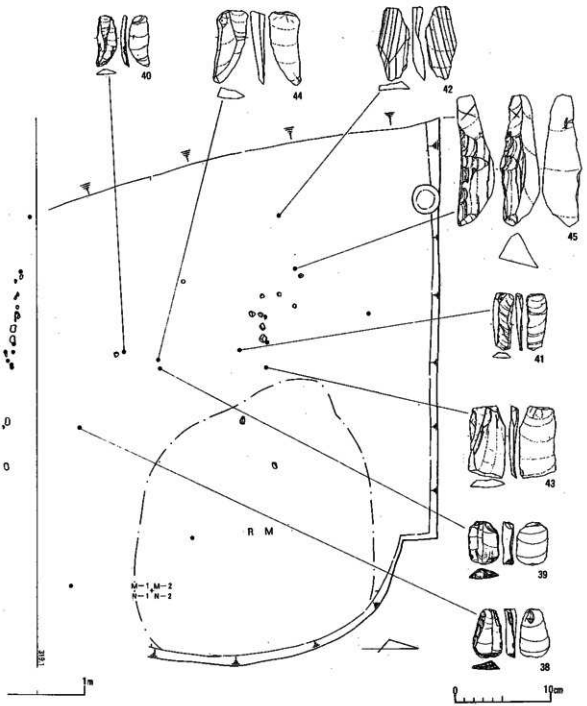


図9　第16地点遺物分布図

2　縄文時代・弥生時代

けものの落し穴と推定される土坑・掘立柱建物址がある。

ＳＫ164～166（図10）

縄文時代のけものの落し穴と推定される土坑である。39Ｋ・Ｌ－９・10区に３基が斜面に直交して並列する。斜面上位から下位にかけて164から166と命名。いずれも長軸１ｍ強の隅丸長方形土坑で、底の中心に小穴をもつ。平成元（1989）年の調査ではＳＫ164の東隣で同様の土坑が検出されていないので、３基のみが並列していたと考えられる。

埋土は自然堆積の様相を示している。注意されるのは中位より少し下に赤味を帯びた土層が認められることだ。当遺跡から北方約６㎞の新堤（しんつつみ）遺跡でよく似た赤褐色土層が確認され、その分析から妙高火山中央火口丘期の火山灰（大田切川火山灰？、ＯＴ－ａ約4000～4500年前）が混入している可能性が指摘されている。[注1] 土坑の掘られた年代を考える参考となる。

遺物は、ＳＫ166から前期と思われる縄文施文土器小片が出土している。

ＳＫ173（図10）

44Ｍ－20区の調査地南壁ぎわで半分を検出。斜面に長軸を直交する点や、形状、埋土に遺物を含まないことが、ＳＫ164～166によく似ているので、同様に縄文時代の落し穴と考える。

注１　早津賢二・小島正巳　飯山市新堤遺跡のテフラ分析『国営飯山農地開発関係遺跡発掘調査報告Ｉ』飯山市教育委員会1991．３

ＳＢ29（図12）

39Ｋ・Ｌ－９・10区にある。２間×１間と推定される掘立柱建物址で、主軸は斜面方向とややずれる。柱穴の規模が他の平安時代の建物址より小さいことや、方位が異なることから弥生時代のものと考えた。

規模は桁行２間（1.5ｍ、1.3ｍ）×梁行１間（1.5ｍ）。柱穴は直径約25㎝の円形プランで、深さは削平地のためか20㎝以内と浅い。

3　平安時代

Ｈ35号住居址（図11）

39Ｍ－９・10区にある。斜面に構築されており、低位の東側は土層断面で壁の立ち上がりが確認できたが、平面では立ち上がりを確認していない。

規模は東西3.65ｍ、南北は柱穴を基準に復元すると推定4.0ｍとなる。

床は一面に貼床がある。高位の西側では黄色粘質土が叩き締められている。低位の東側は一度軟らかい土を除去したのちに、黄色粘質土塊を含む暗灰色土を充填し、その上に黄色粘質土を敷いて叩き締めて貼床としている。貼床上面は土間のように小さいコブ状をしている。

床北側には排水溝と思われる溝がある。

主柱穴は、竪穴壁面に接するようにあるＰ１～Ｐ９と考えている。柱穴はやや内傾して掘り込まれている。東側では２本が１組となっているとも考えられる。主柱穴が竪穴壁面に接する構造の住居址は、当上野遺跡でも７例あり、主柱穴が確認できるものの中ではむしろ主体をなす。また、一方の柱穴が２本１組となる例も１例ある。

カマドは検出していないか、カマドに使用されたと考えられる焼石が、床面に散在しているので、石組みのものと推定される。位置は、竪穴内ピットがある東南隅が考えられるが、攪乱されている。

墨書のある完形の坏が出土したM10区Ｐ２も当住居址に関係ある柱穴の可能性がある。

出土遺物は思いのほか少ない。

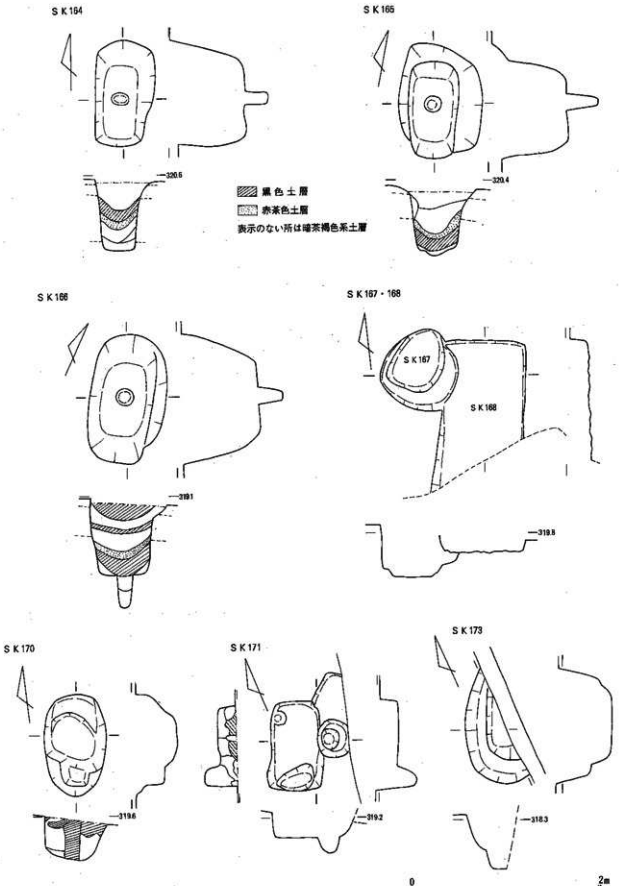

S K 164
S K 165
S K 166
S K 167・168
S K 167
S K 168
S K 170
S K 171
S K 173
320.6
320.4
319.1
319.8
319.6
319.2
318.3
黒色土層
赤茶色土層
表示のない所は暗茶褐色系土層
0
2m

図10　土坑　1：40

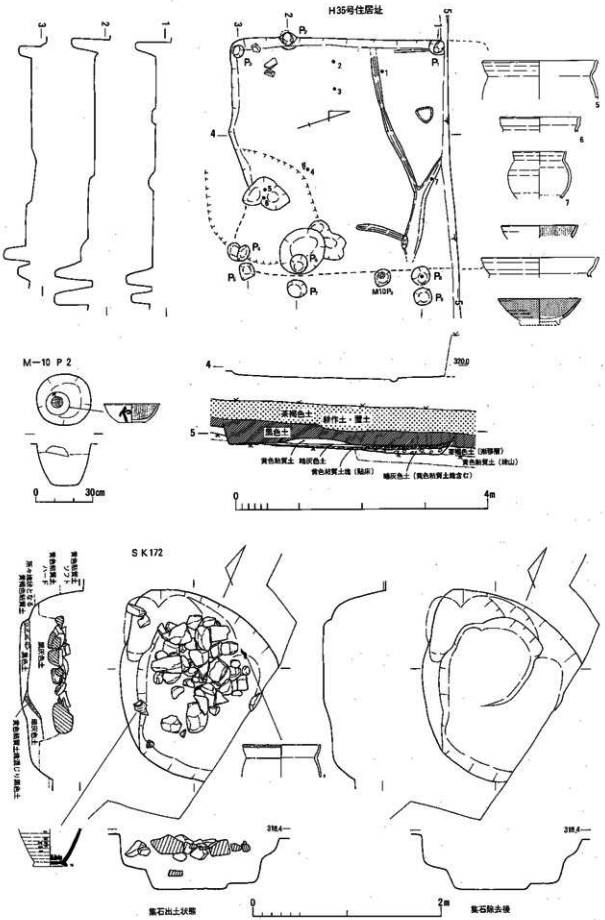


図11　竪穴住居址H35号住居址　1：60　　土器埋納柱穴　1：20　　集石土坑ＳＫ172　1：40

ＳＢ１（図12）

39Ｌ・Ｍ－２・３区にあり、平成元（1989）年に確認した建物址の東側柱列北側３本分を確認した。規模は桁行４間（1.65ｍ等間で6.6ｍ）×梁行１間（2.55ｍ）。ただし南の１間分は東側柱が確認されておらず、３間×１間の建物の可能性もある。

柱穴は直径約50cmの隅丸方形に近い円形プランで、深さは斜面高位側の西側柱列が深いが、底面レベルは東側柱側とほぼ同じ。

各柱穴から平安時代土器片が少量出土している。

ＳＢ２（図12）

39Ｋ・Ｌ－４・５区で、平成元（1989）年に確認した建物址の東側柱列と推定される柱穴を確認した。図12では東西１間に復元しているが、Ｐ２～Ｐ４に対応する柱穴がないため不安が残る。若干位置がずれるが、Ｍ－５区の柱穴や、Ｍ－４区の攪乱で半分以上が壊されている柱穴をひろえば、東西２間に復元できる。南北は４間に復元したが、南端のＰ１・Ｐ６が離れていてやや躊躇する。しかしＰ１・Ｐ６ともにしっかりした柱穴なので４間に復元した。

図示した推定復元での規模は、桁行４間（1.8ｍ、2.1ｍ、1.6ｍ、2.8ｍの4.3ｍ）×梁行１間（2.7ｍ）となる。

柱穴は直径約40～50cmの円形ないし隅丸方形プランで、深さはＳＢ１とちがい一定していない。

遺物はＰ４から土師器甕大破片が出土しているほかに、各柱穴から平安時代土器小片が少量出土している。

ＳＢ30（図12）

39Ｌ・Ｍ－９・10区にあり、Ｈ35号住居址と重複する。切り合い関係は確証できていないがＰ５からの遺物がＨ35号住居址床面上からまとまって出土したことから、Ｈ35住居址より新しいものと考える。

また主軸を斜面に直行させる点で他の掘立柱建物址と異なる。

規模は桁行２間（2.4ｍと2.3ｍの4.7ｍ）×梁行１間（1.7ｍ）。柱穴は直径30～40cmの円形プラン。検出面からの深さは20～30cmと浅い。

平安時代の土器片が各柱穴から出土している。

ＳＫ172（図11）

焼けた石が配されている土坑で、39Ｎ－２・３区で検出された。プランには1.85ｍ×1.7ｍのやや不整な隅丸長方形。底面は２段となり中央が少し深い。東肩は未確認だが下端が東北隅で確認されている。

石は穴を埋めた後にその上に置いたかのような状態で、中央に密集している。大きさは拳大から人頭大。カマドに使用されたような扁平な石も目立つ。注意されるのはほとんどが焼け石であることだ。１つ割ってみたが、中心までよく火が通っていた。

遺物は須恵器瓶片の他に平安時代の土器・陶器が両掌２坏分程出土している。

性格については今のところ不明だが、傾斜変換点、つまり丘頂平坦面の端に位置することや、焼け石を蓋のように置いていることから墓址の可能性を指摘できる。土壌サンプルを採集してあるのでその分析結果も後に参考となろう。

ＳＫ167・168・170・171（図10）

いずれも39Ｌ・Ｍ－５区にある土坑である。ＳＫ167、ＳＫ170は形状、土層観察から柱穴と考えている。ＳＫ167、ＳＫ170、そしてＳＫ171の東隣の柱穴は直線上に並ぶ。１つの建物址の柱穴かもしれない。

ＳＫ168、ＳＫ171は隅丸長方形プランの土坑である。ＳＫ168はＳＫ167を切り、底面は凹凸が著しい。いずれも形状が当遺跡の弥生時代の木棺墓、あるいは平安時代の土坑墓に似ているが、確証がないので保留する。

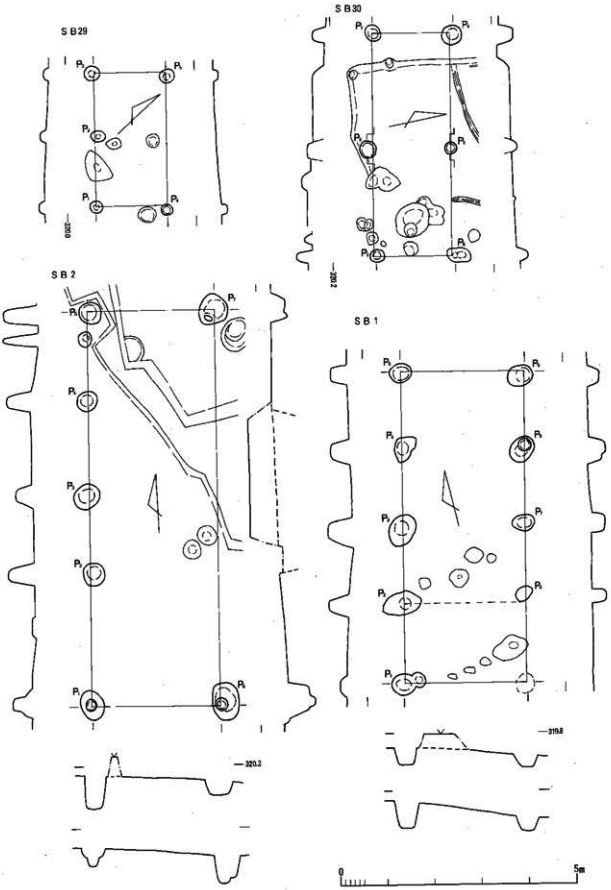


図12　掘立柱建物址　1：80

第4章　遺　　物

1　旧石器時代

旧石器時代の遺物には石器・礫がある。総数約100点の石器が出土したが、このうち後世の遺構内出土石器が約半数あり、本稿では時間的な都合によりおおよその地点分布によって出土した石器を掲載した。

以下に各地点ごとに説明を加える。

(1)　第14地点出土石器（図13～図14）

掻器・削器（図13・1～8、図14・26）　1は近接して接合した接合資料で、9.8cmを測る大形の掻器である。打面には自然面を有し、端部には簡単な加工により刃部を作出している。安山岩製。2は玉髄製の整った掻器で、両縁辺及び端部には入念な加工が施される。刃部はややオーバーハングする部分もあり、刃部再生が盛んに行われたことを示している。3は黒曜石製である。先端部が欠損しているため掻器か削器かはっきりしない。4は正面左側縁に加工を施し、端部には小剥離痕がかなり認められる。削器であろう。玉髄製である。5は破損品で、両縁辺に二次加工痕と思われない小剥離痕が多くある。5は安山岩製で、右側縁中央から先端部にかけて斜めに刃部が作出される。7黒曜石製。小形であるが、先端部に二次加工を施し、やや尖頭状の形態を有する掻器である。8は幅広で中形の刃器剥片を用いて、右側縁から先端部にかけて二次加工を施して刃部を作出している。掻器とした方がふさわしいだろうか。26は黒色の玉髄製の掻器である。刃部は先端部に簡単な二次加工を施して作出している。掻器の厚形整形とはやや異なるものの、形状から掻器とした。

剥片（図13・9～15、図14・16～25）

打面は、調整されたものと自然面のままのものがある。目的的剥片の多くは刃器状剥片で、石刃石核より作出されたものと推定される。21・22は石核稜付き剥片である。24・25は黒曜石製で破損しているが、焼けたものと思われ白乳色を呈している。

(2)　第15地点出土石器（図15）

掻器（図15・27～34）　27はやや幅広の剥片を用いて先端部に厚形整形を施して掻器に仕上げている。27～30も典型的なエンド・スクレイパーである。31は両端部に厚形整形を施した複刃掻器である。オーバーハングが著しい。32も同様に刃部再生が盛んに行われている。以上はすべて玉髄製である。33は欠損品であるが、先端部に入念に加工を施した黒曜石製の掻器である。34も黒曜石製で、基部側両縁辺に調整加工が行なわれ、先端部には浅い加工を施して刃部を作出している。35は削器であろうか。ほぼ中央部から先端部にかけて加熱を受けて白色化している。

剥片（図15・36）　黒曜石製で、先端部を欠く。

敲石（図15・37）　砂岩製で、片手でようやく握れるほどの細長い礫で、端部には敲き痕が明瞭に観察される。

(3)　第16地点出土石器（図16）

掻器（図16・38・39）　両者ともに玉髄製である。38は両縁辺、特に基部側が入念な整形加工が行なわれ、やや広がりを持って先端部の刃部となる。39は縁辺にはほとんど加工が行なわれず、ほぼ平行の縁辺で、先端部の刃部は左側が欠損後再加工が行なわれている。

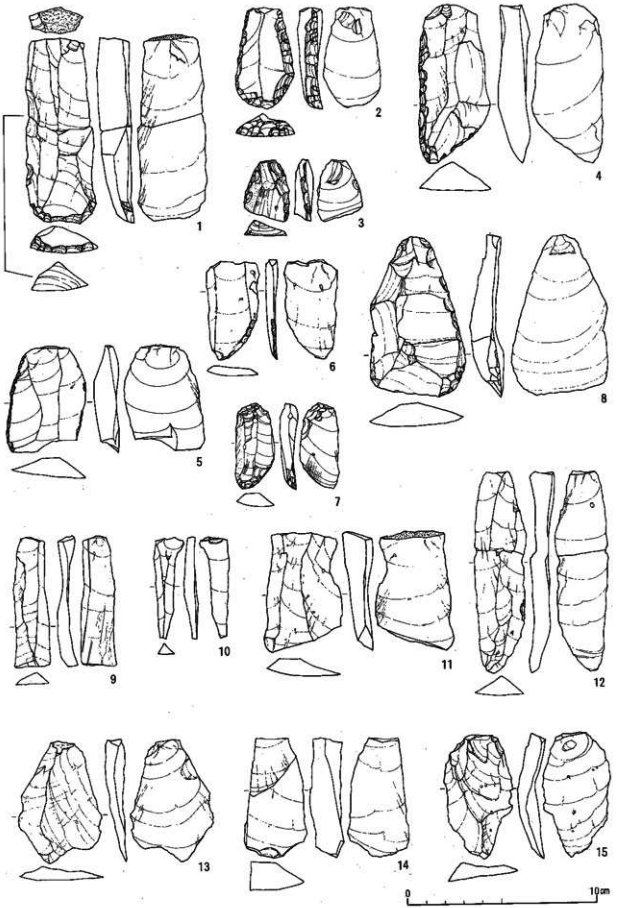


図13　第14地点石器実測図 (1)　1 : 2

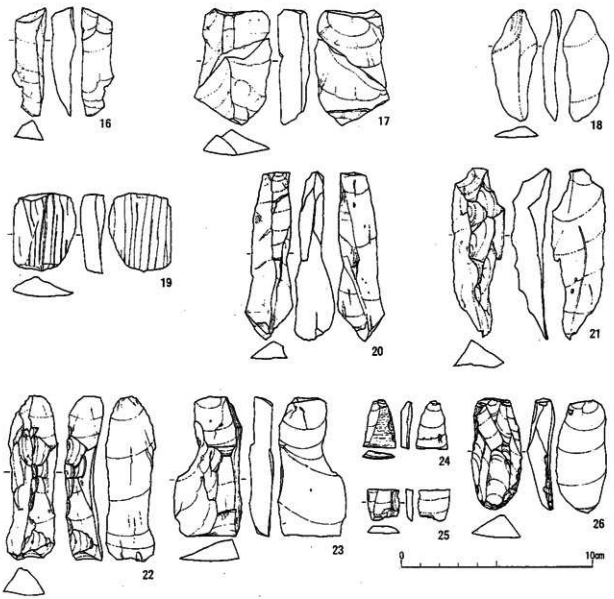


図14　第14地点石器実測図 (2)　1：2

削器（図16・40）　黒曜石製で、やや湾曲した尖頭状の刃部を持つ。

剥片（図16・41～45）　41は黒曜石製。裏面基部側には使用痕であろうか、小剥離痕が目立つ。42～45は安山岩である。それぞれ異質な母岩である。45は大形の剥片であるが、石核稜付き剥片であろうか。

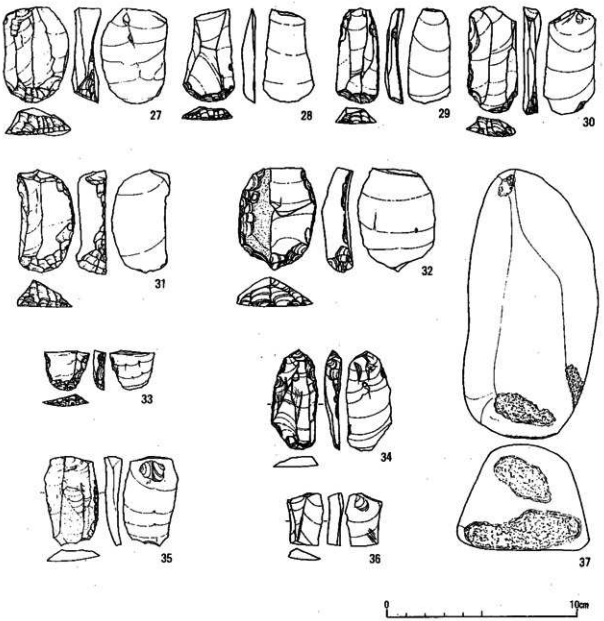


図15　第15地点石器実測図　1：2

(4)　小括

第14～16地点の石器群の比較を通して小括とする。

第14～16地点の石器組成の中心は掻器である。玉髄製掻器がその主体であり、他に削器が伴う。三地点とも組成的には類似しており、15地点のみ安山岩製石器を伴っていないが、遺構の項で触れたように14地点より移動した可能性も考えられる。やや離れている16地点と14・15地点とは、製品・剥片ともに石器製作上の差異は認められない。したがって、同時期の地点分布であると考えてさしつかえないであろう。第14・15地点と近接する第４地点（図４）は出土石器は以前から触れてきたように、玉髄製掻器を主体とする石器群でこれが上野遺跡の指標となる時期と組成であるとしてきたが、今回発見された石器群もその時期と組成に含まれる。

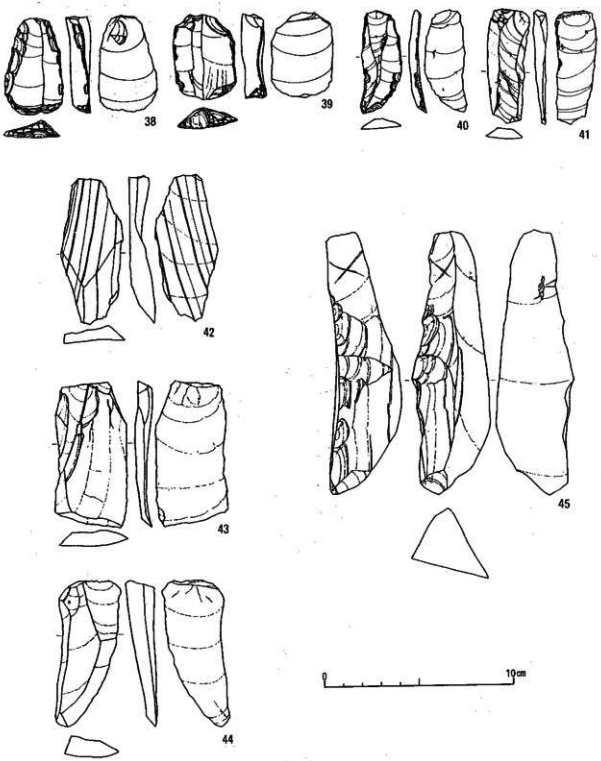


図16　第16地点石器実測図　1：2

番号	石器名	地点	石質	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重量 g	破損	備考	石器固体番号
1	掻器	14	安山岩	9.8	3.7	1.7	64.9	○	接合資料	39L-10.50+58
2	掻器	14	玉髄	5.4	3.1	1.5	20.4			39L－10. 72
3	削器	14	黒耀石	3.3	2.4	1.1	8.4			39L－10. 19
4	削器	14	玉髄	8.3	3.8	1.7	45.1			39L－10. 21
5	削器	14	玉髄	5.1	4.2	1.4	26.9	○		39L－10. 70
6	削器	14	安山岩	5.3	2.8	6.5	8.0			39L－10. 48
7	削器	14	黒耀石	4.5	2.1	1.0	7.8			39L－10. 7
8	削器	14	安山岩	8.6	5.0	1.85	53.6			39L－10. 75
9	剥片	14	安山岩	6.9	1.95	1.0	11.0	○		39L－10. 44
10	剥片	14	玉髄	5.4	1.6	0.8	3.2	○		39L－10. 23
11	剥片	14	安山岩	6.3	4.2	1.6	30.7	○		39L－10. 71
12	剥片	14	安山岩	10.6	2.8	1.4	29.3	○		39L－10. 66
13	剥片	14	安山岩	6.4	4.4	1.0	22.9			39L－10. 17
14	剥片	14	安山岩	6.35	3.4	1.8	32.7			39L－10. 15
15	剥片	14	安山岩	6.6	3.7	1.5	18.3			39L－10. 36
16	剥片	14	玉髄	5.8	1.8	1.3	7.7			39L－10. 1
17	剥片	14	安山岩	6.2	4.05	1.7	35.1	○		39L－10. 84
18	剥片	14	安山岩	6.0	2.4	1.0	7.5			39L－10. 69
19	剥片	14	安山岩	4.2	3.3	1.3	18.2			39L－10. 45
20	剥片	14	安山岩	8.9	2.55	2.1	27.9			39L－10. 34
21	剥片	14	安山岩	9.0	2.75	2.0	33.3			39L－10. 61
22	剥片	14	安山岩	8.65	2.7	2.0	41.5			39L－10. 51
23	剥片	14	安山岩	7.4	3.6	1.4	29.5			39L－10. 52
24	剥片	14	黒耀石	2.5	1.7	0.6	2.2	○		39L－10. 42
25	剥片	14	黒耀石	1.7	1.7	0.4	1.4	○		39L－10. 47
26	掻器	14	玉髄	5.9	2.7	1.5	17.8			39L－10. 4
27	掻器	15	玉髄	5.0	3.5	1.5	27.9			39M－10. 31
28	掻器	15	玉髄	4.9	2.75	0.7	8.6	○		39M－10. 30
29	掻器	15	玉髄	5.0	2.2	1.0	10.2			39M－10. 33
30	掻器	15	玉髄	5.65	2.7	0.95	15.2			39M－10. 2

表1　旧石器時代石器計測表 (1)

番号	石器名	地点	石質	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重量 g	破損	備考	石器固体番号
31	掻器	15	玉髄	5.45	3.1	1.65	25.9			39M−10. 17
32	掻器	15	玉髄	5.4	4.1	1.7	31.4	○		39M−10. 14
33	掻器	15	黒耀石	2.1	2.4	0.65	2.9	○		39M−10. 29
34	掻器	15	黒耀石	5.25	2.45	0.9	10.3			39M−10. 12
35	削器	15	黒耀石	4.7	2.9	1.0	9.9	○		39M−10. 22
36	剥片	15	黒耀石	2.8	1.9	0.85	4.0	○		39M−10. 7
37	ハンマー	15	砂岩	14.2	7.0	5.55	734.5			39M−10. 5
38	掻器	16	玉髄	5.1	3.2	0.8	20.6			39M−2. 24
39	掻器	16	玉髄	4.5	3.3	1.3	19.3			39M−2. 18
40	削器	16	黒耀石	5.4	2.2	0.9	6.1			39M−2. 19
41	剥片	16	玉髄	6.1	2.1	0.8	7.7			39M−2. 15
42	剥片	16	安山岩	7.7	3.2	1.25	25.7			39M−2. 4
43	剥片	16	安山岩	7.6	3.85	0.95	30.8			39M−2. 14
44	剥片	16	安山岩	7.65	3.45	1.6	28.1			39M−2. 17
45	剥片	16	安山岩	13.8	4.2	4.0	171.3			39M−2. 3

表2　旧石器時代石器計測表 (2)

2　縄文・弥生・古墳・平安時代

縄文時代以降の遺物は全部でコンテナ2箱弱と少ない。含包層である黒色土層が斜面上位の西側で削平されていたことにもよるが、東側でも黒色土中の遺物の出土は少なかった。量的には弥生時代中・後期とりわけ中期後半の栗林式土器が大半を占めるが、いずれも小片のため図示していない。

A　土器・陶器（図17・1～16）

図17は出土の縄文・古墳・平安時代の土器・陶器である。

1は落し穴ＳＫ166出土の縄文土器。斜縄文が浅く施文される厚手の土器で、縄文前期と思われる。

2は古墳時代中期の坏で、内面が黒色処理されている。粗いヘラミガキ調整が施されている。当遺跡では古墳時代初頭の北陸系の土器が、方形周溝墓や竪穴住居址から出土しているが、中期土器の出土は少ない。

3～6は黒色土器坏である。4は外面が口縁近くまでヘラケズリされている。6は竪穴住居址Ｈ35号住居址東隣の柱穴出土の完形の坏で、内湾する体部をもち、底部にヘラケズリが加えられる古い様相を呈している。外面に墨書がある。字は鮮明だが判読不明。

7は重機による表土除去中にＭ・Ｎ－9・10区から出土したもので、もとは完形と思われるが残念ながら一部それも墨書部分を欠く。土師器坏で、底部にロクロ糸切り痕を残す、形態は古い様相を呈する。

8～10は土師器甕である。外面に煤が付着している。8は口縁端面が内傾する越後型の特色をもつ。当遺跡では越後型の甕は古い段階に伴う。

11～13は小型の甕。外面に煤が付着する。

14・15は灰釉陶器。14は素地がやや粗で、黒色粒を含む灰白色を呈する。釉は後出の口縁部近くに漬け掛けされるものとちがい内外面ともに底部近くまで全面施釉されている。黒笹90号窯式期のものか。15は素地が緻密で灰白色を呈する。東濃系か。

16は須恵器瓶で、集石土坑ＳＫ172出土。外面はハケののちロクロケズリされている。

平安時代の土器・陶器のうち、Ｈ35号住居址出土のものは、当遺跡でも古い様相をもつものが多く、10世紀でも前半頃にその中心が求められる。

B　石器（図17・17～19）

縄文時代遺構の剥片以外の石器は3点の出土のみであった。剥片については時間的な余裕から掲載できなかった。

石鏃（17）　Ｍ－5区出土品、遺構には伴っていない。安山岩製で、無茎の石鏃である。縁辺は鋸歯縁状となっている。縄文時代の所産であろう。

石器未製品（18）　石鏃かスクレイパーの未製品と思われる。横長の剥片を用いて基部側の高まりの部分に加工をしているが仕上がっていない。縄文時代であろうか。

磨製石斧（19）　蛇紋岩製の太型蛤刃石斧の胴部部分のみである。弥生時代。

C　鉄製品（図17・20）

Ｈ35号住居址から角釘が1点出土している。小型の角釘で、頭部は偏平で折り曲げられるタイプのものである。先端を欠く。現存長4.4cm。

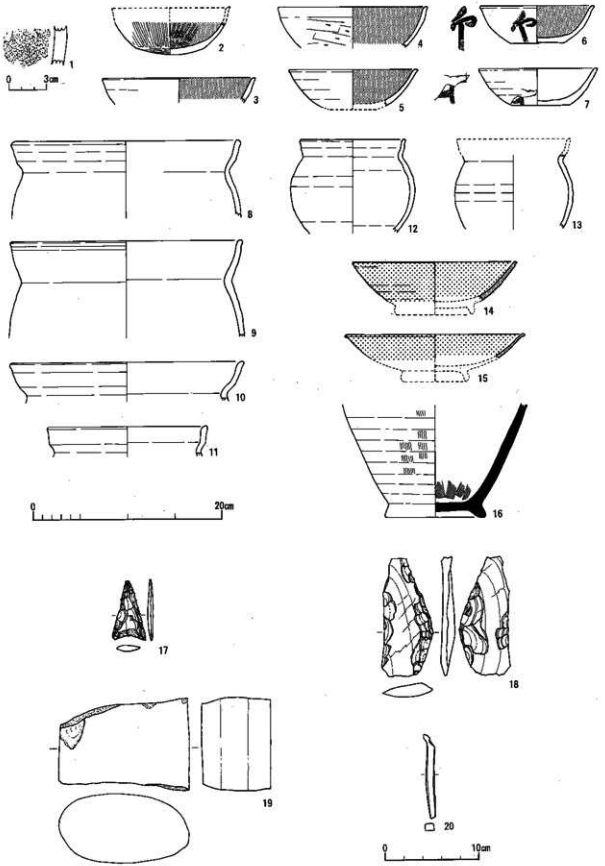


図17出土遺物　土器・陶器・石器・鉄製品　1：3、1：4、1：2

1：SK166　2：44M・N－19：20　3・8・10・11・12・14・20：H35住居址　5・9・16：SK172
4・7・14：39M・N－9・10　6：39M－10P2、13：39M－10P1　15・17・19：39M－5　18：39N－4

PLATE

調査区近景（南から）

調査区南側調査風景

調査区北側調査風景

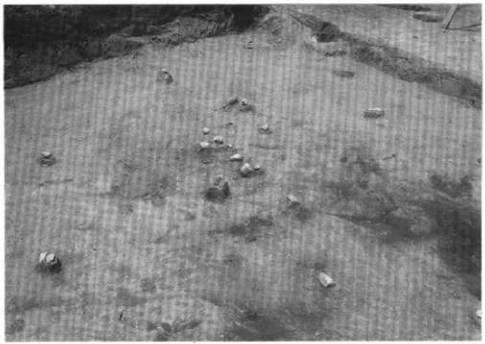
調査区南側完掘状況

調査区北側完掘状況

現地説明会風景（５月15日）

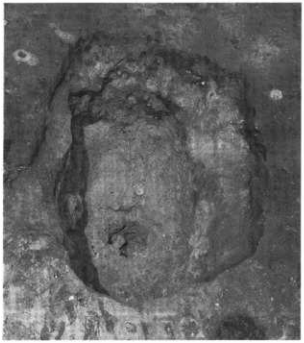
旧石器第14地点（東から）

旧石器第15地点（南から）



旧石器第16地点（東から）

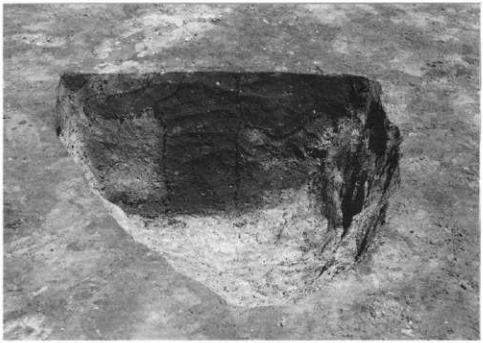
第164号土坑（ＳＫ164）



第165号土坑（ＳＫ165）

第166号土坑（ＳＫ166）

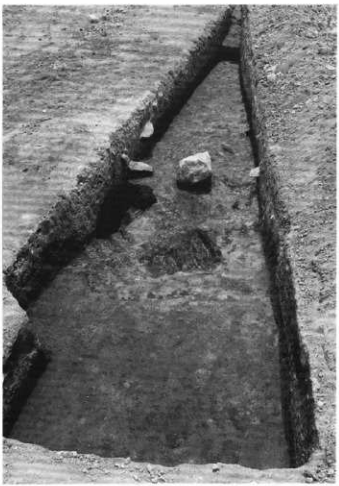
第167・168号土坑（ＳＫ167・168）



第170号土坑（ＳＫ170）

第171号土坑（ＳＫ171）

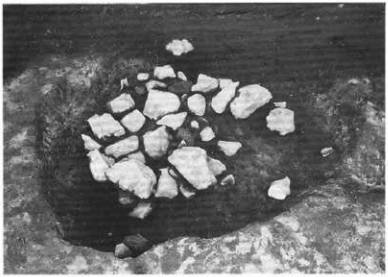
H35号住居址・第30号掘立柱建物址（ＳＢ・30）　東から



第173号土坑（ＳＫ173）

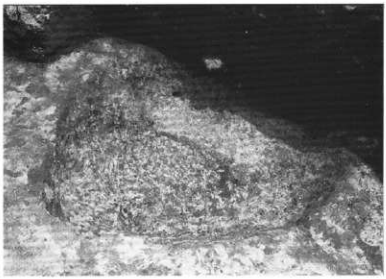
第172号土坑（ＳＫ172）

土坑内集石検出状況



半割状況

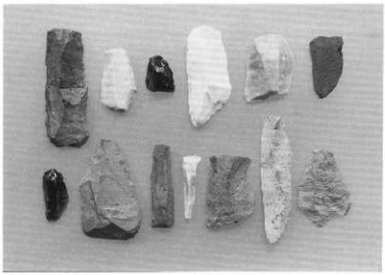
完掘状況



第29号掘立柱建物址（ＳＢ29）　東南から

第１号掘立柱建物址（ＳＢ１）　北から

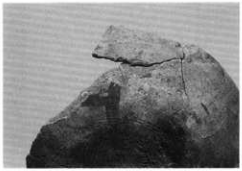
旧石器第14地点
出土石器



旧石器第15地点
出土石器

平安時代の遺物（土器・陶器・釘）

墨書土器



墨書土器（部分）

飯山市埋蔵文化財調査報告　第54集

上　野　遺　跡　Ⅸ

平成９年３月14日

編集・発行　長野県飯山市教育委員会
長野県飯山市大字飯山1,110－1

印　　刷　㈲ 足 立 印 刷 所